

モノから信仰をとらえる : 共同研究 : モノをと おしてみる現代の宗教的世界の諸相

著者	八木 百合子
雑誌名	民博通信
巻	160
ページ	16-17
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00009034

共同研究 ● モノをとらえてみる現代の宗教的世界の諸相 (2017-2019年度)

産業化やグローバル化の加速を背景に近年、宗教的な領域における商品化もかつてないほど急速に進んでいる。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拜あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、ときには信仰を異にする人びとの手にまで拡散している。こうしたモノが導入された地域では、それまでにみられなかったスタイルの信仰実践が生み出されるなど、宗教的な領域におけるモノの存在やそれをとりまく動向は、現代の宗教的世界のあり方を理解するうえで看過できない現象のひとつである。

本研究では、世界各地で拡散・変容する宗教的なモノに注目し、それをめぐる多様な事象から、今日の宗教の展開について比較検討しようとするものである。以下では、これから始まる研究会において検討されるテーマの一部について紹介したい。

モノから信仰を問う

宗教の文脈においてモノはどのような位置を占めてきたのだろうか。たとえばキリスト教では神学上、物質より精神を重視する立場をとるため、モノから信仰形成を論じることは否定的にとらえられてきた。モノの側から信仰を論じることは、偶像崇拜と紙一重の性格を有するからである。それゆえ、神々のイメージをかたどった物質的なモノとして聖像や聖画の存在は認められるものの、説教のなかでモノが占める位置は限られてきた。こうしたモノに対する態度はイスラム教においてはより顕著で、唯一神の存在を重視するイスラム世界では、神を表象するモノの存在すら認められてこなかった。



店先に並ぶさまざまな聖像(2012年9月、ベルー、八木百合子撮影)。

人類学でもE.B.タイラー(1962)が、宗教とは「霊的な存在への信仰」であるとアニミズム論を提唱して以降、その関心は霊的存在や超自然的存在に向けられてきた。そうしたなかで、モノは世界観をあらわす象徴や儀礼の道具とみなされるにとどまってきた。

凶像や神像に対する礼拝を重視するヒンドゥー教のように、信仰実践においてモノが重要な役割を果たしている場合もあるが、宗教の文脈においては多くの場合、モノは副次的な存在でしかなく、儀礼や宗教空間を構成する多様なモノの存在は等閑視される傾向にあった。そうしたモノの存在や役割をより積極的にとらえていくのが本共同研究である。つまり、モノを中心に宗教的な世界を眺めてみる試みである。

宗教空間を構成する多様なモノ

じっさい、儀礼や祭祀をはじめとする実践面や宗教空間に目を向ければ、多くのモノが存在する。キリスト教においても、とりわけカトリックでは、聖像や聖画などはもちろん、祭壇を飾る装飾品やミサに使われる聖杯、聖歌を奏でる楽器や鐘、信者の願いや信仰心が象られた奉納物、祈りの際に用いられるロザリオと呼ばれる数珠など多様なモノが存在する。これらは人びとの宗教実践において不可欠なものである。

そして、そこに存在するモノは単なる道具や装飾の域にとどまらない。その一つ一つが、人びとの実践や信仰において何らかの力を発揮していると考えられるからである。われわれがこうした聖なるモノに触れるとき、あるいは寺や神社、教会を訪

れた際に感じる神聖な感覚や力は、それらの空間を構成するモノの存在と無縁ではないはずである。

たとえば人とモノの関係やモノのエイジェンシーに注目する観点から足立(2009)は、仏教とは心の問題として考えがちであるが、教義や観念を習得した人びとの身体と、寺院の構造や、家の仏壇、仏教の標語を書いた看板、経典などのものに埋め込まれ、こうしたさまざまなアクターが媒介しあうなかで意味を成し作用していると述べる。

モノを焦点化する本研究では、神像や聖画のように信仰や崇敬の対象とされてきたモノだけでなく、宗教的实践にかかわるさまざまなモノ、祭具や音具、儀礼空間を形づくる装飾品や奉納物、仏塔のような宗教構造物な

ど、宗教的文脈においてこれまで単に儀礼の装置やシンボルとして見過ごされてきたようなモノも視野に入れ、人・モノ・信仰の三者の諸関係について考察を深めていく。そうすることで、モノを介した信仰の多様なあり方が浮かび上がってくるだろう。

変容するモノと実践

そうした宗教的なモノのなかには近年、技術やメディアの進化により、新たな様相を呈しているものも少なくない。

その一例として、本共同研究のメンバーの長嶺亮子(沖縄県立芸術大学)が目にする、電子念仏機を紹介しよう。これは仏教の梵歌などが数曲～数十曲ほど内蔵されている小型の再生機で、電源を入れるとループ再生される。仏教では本来、梵歌や聖歌あるいは詠唱される経典は、信仰にともなう音楽的な実践とされてきた。つまり、仏に捧げるために音楽を奏で、また当事者がその行為のなかで仏教の規範を学び、あるいはその音楽に触れることで心を穏やかにするのである。ところが、電子念仏機の場合、たしかに法具または音具として信仰の空間で用いられてはいるが、そこには音楽を奏でるという実践を通じた信仰の行為自体は消えているといわざるをえない。

音具のようにモノを奏でたり、あるいは神仏に捧げる奉納物などでは、モノを制作したりすることが信仰形成につながる場合もある。つまり、モノと関わる実践のなかで信仰が育まれるのだが、モノとそれに関わる実践が一種の「既製品」と化し、新たなモノとして変貌をとげると、モノと人との関係や人びとの信仰のあり方は、いかに変容しているのだろうか。こうした近年変わりゆく宗教的なモノをめぐる問題から信仰の現代的な諸相に迫ってみたい。

モノを介して拡がる信仰の世界

冒頭で触れたように、宗教的なモノは近年の大量生産化・商品化のなかで、既存の文脈をこえあらゆる方向に拡散している。とくに新たなメディアの登場は、従来の宗教が占めてきた領域を大きく押し広げている。先ほどの念仏機を例にとってみても、それは再生機として流通・消費されるにとどまらず、最近ではスマートフォンのアプリとしても出回り、場所を問わず簡単に入手・利用することが可能になっている。新規のメディアを通



仏教の一種として知られるチベットの伝統宗教ボン教のチオルテン(供養塔)。チオルテンは単なる塔ではなく、人びとの信仰を集結したモノである。なかには、村人たちが集落を守るために持ち寄ったさまざまな供物が納められ、人びとの協働によって建立される(2009年12月、中国、小西賢吾撮影)。

じて流通・拡散する宗教的なモノは、インターネットの普及したインドのヒンドゥー教徒のあいだなどでも顕著な事例がみられるが(三尾 2017)、それに関わる人びとの実践を変容させるだけでなく、その受容者のすそ野も広げている。宗教的なモノは新たな媒体を通して、教会や聖職者が到達しえない異国や僻地の人びとや個人の私的領域にも容易に浸透しているのである。

本研究ではこうした宗教的なモノの動向を把握することで、モノやイメージといった非言語的な側面から宗教の展開をとらえることを目指したい。それにより、これまでとは異なる宗教の新たな様態を描き出すことができるのではないかと考える。

以上のように、本研究は近年拡大するモノの生産・流通・消費の局面を見据え、それが各地に及ぼすさまざまな影響を浮かび上げさせ、宗教的領域におけるモノの役割、モノを介した信仰の現代的諸相について考えていくものである。そのために、人類学だけでなく、宗教、芸術、音楽などを専門とするメンバーが、それぞれの分野で扱われてきた宗教的なモノを焦点化し、本課題に取り組んでいく予定である。

【参考文献】

- 足立明 2009「人とモノのネットワーク モノを取りもどすこと」田中雅一編『フェティシズム論の系譜と展望』pp. 175-193, 京都: 京都大学出版会。
- タイラー・E. B. 1962『原始文化—神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』東京: 誠信書房。
- 三尾穂 2017「モノを通じた信仰—インド・メーワール地方の神霊信仰における身体感応的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3): 215-281。



中国で流通している電子念仏機。電源のみを入れるとループ再生されるタイプ(左)のほかに、ボタン操作で選曲が可能なもの(右)もある。右の念仏機は販売時には上段の箱に入られている(2017年12月、中国、長嶺亮子撮影)。

やぎ ゆりこ

国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教。専門は文化人類学、ラテンアメリカ地域、とくにアンデス地域の民族学研究。著書に『アンデスの聖人信仰—一人の移動が織りなす文化のダイナミズム』(臨川書店 2015年)、『聖女に捧げられた大聖堂—近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト』『アンデス世界—交渉と創造の力学』(世界思想社 2012年)などがある。